



土方稲嶺筆《猛虎図屏風》(部分) 個人蔵

企画展 平成30年10月6日(土)～11月11日(日)

2 **鳥取画壇の祖 土方稲嶺** —明月来タリテ相照ラス—

企画展 平成30年11月23日(金・祝)～12月24日(月・振休)

3 **ミュージアムとの創造的対話vol.2 空間 / 経験** そこで何が起きているのか?

企画展 平成31年2月16日(土)～3月10日(日)

4 **Our Collections !**
—鳥取県のアート・コレクションの、これまでとこれから—

5 [自然] コラム **舞妓さんが絶滅する?** —マイコアカネ(舞妓菌)という赤とんぼの話—

6 [人文] 資料紹介 **「宮本家文書」**が寄贈されました

コラム **改葬された伊福吉部徳足比売の墓**

7 [美術] テーマ展示 **美術部門テーマ展示Ⅱ「生誕100年山本兼文展」**
若桜橋のモニュメントについて—山本兼文の野外彫刻を訪ねて

コラム **「ワークショップつくり隊」の活動**

8 **美術館準備室コラム、河北博物院との交流20周年記念展のご紹介**

企画展

平成30年10月6日(土)～11月11日(日)

ひじかたとうれい 休館日：10月22日(月)

鳥取画壇の祖 土方稻嶺

—明月来タリテ相照ラス—

(主催)「土方稲嶺展」実行委員会

今から約250年以上前に、江戸時代の鳥取を代表する一人の画家が誕生しました。名前は土方稲嶺(ひじかた・とうれい/1741～1807)。江戸で当時最先端の画法を広めていた宋紫石に就いたのちは、円山応挙や伊藤若冲らが活躍する京都に移り、青蓮院門跡や妙心寺と深い繋がりを持ちながら精力的に活動しました。晩年に鳥取藩絵師

として召し抱えられた以後も使い続けた「稲嶺」という画号には、鳥取出身の画家という自負が込められているようです。

今年の秋は、この稲嶺の大回顧展を開催し、会期中には多数のイベントを予定しています。作品鑑賞と併せて、ぜひお楽しみください。

(美術振興課 山下 真由美)



展覧会ポスター



土方稲嶺筆《猛虎凶屏風》個人蔵

《企画展関連イベント》

体験型ミニレクチャー「^{かけしく}掛軸を巻いてみよう！」

11月10日(土) 11時～、14時～(約30分)
(各回定員10名、要申込【10月26日(金)～電話受付開始】、無料)

日本の伝統的な絵画の形態である“掛軸”。かつては季節や年中行事に合わせて掛け替えて楽しんでいたものですが、現代は床の間のない家庭が増え、絵を飾るという文化も馴染みがないものとなってしまいました。しかし、鳥取にはまだ床の間のある家がたくさんあるからでしょう、博物館に来てくれた小学生や中学生に、掛軸を見たことがあるかどうか聞くと、「おうちで」あるいは「おばあちゃんの家で」見たことがあるという答えが返ってくることも多く、とても喜ばれた環境にあると感じます。

ただ子どもたちの親世代はもちろん祖父母世代も、すでに軸の扱いに不慣れなことが多いのも現実です。昭和の高度成長期における生活スタイルの劇的な変化により、もはや軸を掛けたりしまったりすることが、生活の一部ではなくなったことが要因でしょう。

掛軸の「正しい扱い方」をマスターすることは、日本の伝統文化を身に付けることでもあります。子どもたちはもちろん、ご自宅、あるいは祖父母宅に眠る掛軸の扱いがわからずお困りの方も、ぜひご参加ください。



伊藤若冲筆《海老図》千葉市美術館蔵



ギャラリートーク「はじめての“とうれい”」

10月6日(土) 大人編、11月3日(土) こども編
各日14時～15時(申込不要、要観覧料)

10月6日の大人編では、「とうれい」って誰? という方にもわかりやすく展示作品を解説し、11月3日のこども編では、解説よりも鑑賞に焦点を置き、日本絵画の魅力をじっくりと味わっていただく内容を予定しています。

特別講演会I「稲嶺のいた京都」

10月13日(土) 14時～15時30分(申込不要、無料)

若冲ブームの火付け役ともいえる狩野博幸氏(美術史家)をお招きし、応挙や若冲らとともに稲嶺も活動していた十八世紀の京都画壇についてお話しいたします。

特別講演会II

「^{なんびんは}南蘋派からみた土方稲嶺」

10月20日(土) 14時～15時30分(申込不要、無料)

北斎館館長で“萬美術屋”として「大妖怪展」他さまざまな展覧会の監修を務める安村敏信氏をお招きし、稲嶺の画風のベースとなっている“南蘋派”の特徴についてお話しいたし、そこから稲嶺が独自の画境を切り開いた作品に触れていただきます。

スペシャルギャラリートーク「稲嶺の魅力を語る！」

10月27日(土) 14時～15時(申込不要、要観覧料)

斬新な視点で数々のユニークな企画展を立ち上げ、わかりやすい著書を多数ご執筆されている府中市美術館の金子信久学芸員をお招きし、展示室を一緒に回りながら、稲嶺の魅力を語っていただきます。

■企画展観覧料：一般/800円

(団体・前売・大学生・70歳以上/600円)高校生以下無料

ミュージアムとの創造的対話vol.2 空間／経験 そこで何が起きているのか？



梅田哲也《Black out EXPO》2009



小山田徹《Weekend cafe 2017 Kyoto, Sujin》



田口行弘《PokePoke(ポケポケ)》
オークランド、ニュージーランド、2017
photo: Yukihiko Taguchi, Courtesy of the artist and MUJIN-TO Production

当館は1972年の開館以来、「博物館はみんなの広場」というミッションのもと、様々なプログラムを通じて、文化芸術を保存し、次世代へ継承していくための活動を行ってきました。これをさらに広げ、オープンエンドな「未来の美術館」の姿を描くための試みとして、2017年よりシリーズ展「ミュージアムとの創造的対話」を始めました。この企画展は、「ミュージアム」という場所は従来の枠組みにとらわれないという精神のもと、国内外の優れたアーティストによる実験的で多彩な表現を展示室の内外に展開させて、ミュージアムを批判的な視点をもってながめ、対話していきながら、これからの美術館／博物館の在り方、その可能性を模索するものです。第一回目は「誰が記憶を所有するのか」という問いから、「モニュメント」と「ドキュメント」を切り口に、記憶の在り方と、それとの関わり方をテーマに白川昌生、中ハシクシゲ、西野達の3名の作家による展示を行いました。

第二回目となる今回は、空間とそこでの経験に着目してみたいと思います。あらゆるミュージアムには「展示室」

という空間が備えられ、展覧会では、ある文脈（テーマ）のもとに集められた作品や資料と対峙し、吟味し、そこに表されたり、現れたりする意味や内容を読み取り様々に想いを巡らす、という特殊な経験—鑑賞を行います。ある一定の距離を保ちつつ（大抵の場合展示されているものには触れられません）キャプションと解説を付き合わせながら、うやうやしくそのものを受け取るこの行為は、日常生活ではめったにないことであり、それゆえミュージアムが特別な場所であることを物語っています。

こうしたミュージアム空間における経験—鑑賞のあり方は、美術における表現の多様化によって著しく変化してきました。空間全体が作品として作られる「インスタレーション」は、作品全体を見渡し、把握することは不可能で、まずそこに「身を置くこと」が重要となります。水や石、ライトや扇風機など身の回りの日用品を展示空間に配置する梅田哲也の作品では、来場者は空間／作品の内部を歩き回り、断片の観察を積み重ねながら、さまざまな現象に立ち会うことを経験します。あ

るいは限定的な時間と形を残さないことを特徴とする「パフォーマンス」は、ミュージアムというよりも劇場体験に近いものを提供するでしょう。小山田徹は、空き地や公園など、野外で小さな火をおこすことで、人が集まり、共有する場—極小の空間を作り出します。これは一種のライブ・パフォーマンスでもあり、ワークショップでもあり、プロジェクトでもある、既存のジャンルに分類することが困難な作品であり、来場者は鑑賞者というより「参加者」として、作品を経験します。

本展では、こうした空間や作品との関係性を新たに切り結ぶアーティストによる展示を展示室および、博物館外の公共空間や空き施設で行います。未知と可能性に開かれた展示をぜひ経験しにご来場ください。

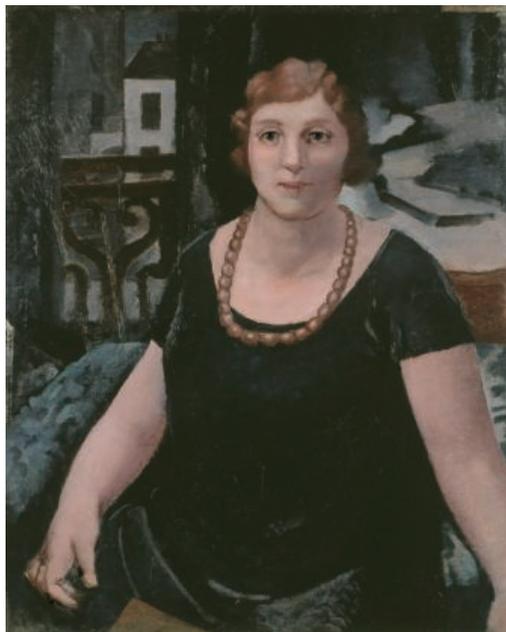
(美術振興課 赤井あずみ)

《関連イベント》

会期中の土曜日には、講演会、ギャラリートークなどのイベントを予定しています。

■企画展観覧料：一般/600円
(団体・前売/400円)

Our Collections! 一鳥取県のアート・コレクションの、これまでとこれから一



前田寛治《西洋婦人像》1925年頃 油彩・キャンバス

1972(昭和47)年10月1日に開館した鳥取県立博物館。今年の10月で46周年を迎えます。そして今、当館の美術部門を分離させ、倉吉市内に新しく県立美術館を建てるための準備を進めており、その整備基本計画をとりまとめたところです。

美術館の性格を大きく左右すると言われるコレクション。日本語に訳せば「蒐集品」「所蔵品」となります。古くは、中国の歴代王朝やローマ皇帝などが各時代の優れた美術品を集めたり、イタリアのルネサンス期にはメディチ家などの有力者が同時代の芸術家を支援して一大コレクションを形成したことが知られています。そして近代以降は、大企業や裕福な個人などがそれぞれの審美眼で美術品を集め、それらを紹介する展示会はしばしば注目を浴びます。

一方で、国内外の国公立美術館などが、ある一定の評価基準や収集方針などを設定し、一般に公開することを前提に継続的に形成されるパブリック・コレクションというものがあります。当館の美術部門ではこれまで、「鳥取

県にゆかりのある近世以前から現代までの美術作品」を中心に、「鳥取県の自然や風物などを題材にした美術作品」「郷土作家とつながりをもつ国内外の作家の優れた美術作品」を集めてきました。この「地域ゆかりの美術品の収集」という方針は、その地域の人々が生み出した優れた美術表現を調査して収集・展示し、次の世代に引き継ぐために保存していくことは、そこにある公立美術館の責務であるという考えに基づいており、それは世界中で普遍的に見られるものです。整備基本計画にも、「県博が収集してきた美術作品等を引き継ぎ、鳥取県にゆかり

のある優れた美術作品等を中心としながら、コレクションの充実を図ります。」としています。

しかし、「鳥取県にいながらにして、海外の有名な作家の作品を見てみたい!」といった声を県内各地でお聞きするのも事実です。そこで整備基本計画では、「コレクションポリシー(収集方針)の見直しを図り、より広範囲の、国内外の優れた美術作品等の収集を図ります。」と謳っています。現在準備を進めている年明けの企画展「Our Collections!」は、新しい鳥取県立美術館のコレクションがどのようなものになるかをイメージしてもらうために、そして多くの方々に美術館に関心を持ってもらうために開催するもので、おもに次のような展示構成を考えています。

「第一章 鳥取県によ

る美術品収集の歴史を作品とともに紹介」「第二章 なんらかのテーマを設定(前田寛治とその周辺、鳥取の風景等)して作品を紹介」「第三章 事前に行った人気投票で選ばれた作品を紹介」。ここでは、当館が開館した年に収集された前田寛治の作品《西洋婦人像》や、平成12年度に寄贈を受けた砂丘を描いた画家・國領経郎の作品、土方稲嶺や辻替堂といった根強い人気のある作家の魅力的な作品など、これまでのコレクションの姿を紹介します。

そして第四章では、美術館の新しい収集・展示方針を示すことを視野に入れ、「戦後から現代までの優れた作品」や「次世代(若手)による優れた作品」など、想定されるこれからのコレクションのイメージを、学芸員が調査し、県内外から借用するさまざまなタイプの作品でかたちにしてみたいと考えています。ぜひご覧ください。

(美術振興課 三浦 努)



國領経郎《遠い海》1977年 油彩・キャンバス

《関連イベント》

会期中の土曜日には、アーティストトークや担当学芸員による展示解説などのイベントを予定しています。

■企画展観覧料：一般/400円(団体/200円)

まいこ ぜつめつ
舞妓さんが絶滅する？ —マイコアカネ(舞妓茜)という赤とんぼの話—



マイコアカネ(♂). 成熟したオスの顔は青白色。 ※これは他県で撮影された写真です。

「赤とんぼ」とは

「赤とんぼ」とは文字どおり赤い色のトンボですが、分類学的にはトンボ科アカネ属のトンボのことを言います。このアカネは茜色^{あざいろ}を意味しています。茜色とは植物のアカネの根で染めた、沈んだ赤い色のことですが、赤とんぼの色と似ているということでしょう。ちなみに、植物のアカネの名前は、赤い根をしていることが由来と言われています。

鳥取県で記録のあるアカネ属のトンボは16種ですが、現在、確実にみられるのは10種くらいです。身近なところでは、アキアカネ(秋茜)、ナツアカネ(夏茜)、マユタテアカネ(眉立茜)、ノ

シメトンボ(熨斗目蜻蛉)などがみられます。これらの名前は、その種類の特徴を表しているのも、名前の由来を調べてみるのも楽しいものです。

鳥取県のマイコアカネ

アカネ属のトンボの中に、マイコアカネ(舞妓茜)という優雅な名前の赤とんぼがいます。このトンボの顔は、成熟するとききれいな青白色^{せいはくしよく}になります。この様子から舞妓さんをイメージしたのです。舞妓さんは宴席に興を添える少女のことですが、じつは顔が青白色になるのはオスのトンボだけで、メスの顔の色は変わりません。

このような名前の由来をもつマイコアカネですが、鳥取県では半世紀以上、その姿をみる事ができていません。鳥取県立博物館には、1968年採集のマイコアカネとされた標本が1個体だけありましたが、再調査したところ、この標本はマユタテアカネでした。これまで鳥取県のマイコアカネの記録は1968年がもっとも新しいとされていたのですが、そうではなくなりました。これも標本が残されているから判明したことであり、資料保管の大

切さがわかります。

それでは鳥取県のマイコアカネの標本は残っていないのでしょうか。現在わかっているところでは、1956年9月30日に鳥取市青谷町露谷で採集された1個体が大阪市立自然史博物館に保管されています。マイコアカネは、1956年以降、鳥取県では確かな記録がないのです。

マイコアカネを探そう!

マイコアカネは近年、全国的に産地が激減しています。お隣の島根県でも2007年の確認を最後に10年以上みつかりません。マイコアカネは、平地のため池のまわりなどの植物の豊かな開けた湿地帯に生息しています。大きさは、アキアカネなどより一回り小さいです。ほんとうに鳥取県の舞妓さんは絶滅したのでしょうか? 確実に見分けるには、胸部の黒いスジ模様をみなければいけません。舞妓さんのような顔をした赤とんぼをみつけたときは博物館に連絡をお願いします。



ヒメアカネ(♀). 2017年9月29日、鳥取市国府町菅野。

舞妓さんのなかまも探そう!

マイコアカネ以外にも、鳥取県で絶滅が心配されている赤とんぼにヒメアカネ(姫茜)とコノシメトンボ(小熨斗目蜻蛉)がいます。ヒメアカネは赤とんぼの中でもっとも小さく、体長は3センチくらいです。ぜひ小さな赤とんぼにも目を向けてみてください。

(学芸課 川上 靖)



ノシメトンボ(交尾中の♀). 2006年10月14日、鳥取市湖山町。赤くなるのはオスだけ。

資料紹介

「宮本家文書」が寄贈されました

今回は「宮本家文書」という古文書について紹介します。宮本家は米子の商家で、後に県外に転出しますが、多数の証文や商売関係の資料が伝わっていました。この度ご子孫のご厚意により、宮本家文書が当館に寄贈されました。

この文書の中には、大内義隆・陶晴賢・毛利輝元・吉川元春・小早川隆景など、中国地方の戦国時代を語るにおいて欠かせない人物たちの発給文書が含まれており、鳥取県の中世史を知る上で重要な資料です。写真は山陰地方を治めた吉川元春の書状（書簡）です。

この書状は天正13年（1585）の豊臣秀吉による四国攻撃の際に出されました。当時、吉川元春の息子の元長が出雲・隠岐・伯耆国西部を治めてお

り、伊予国（現：愛媛県）に出陣していました。ところが、吉川軍主力の留守を狙って行松氏らが反乱を起こし河原山（現：米子市淀江町）に立て籠もりました。淀江の武士福頼左衛門尉は河原山から反乱勢力を追い落とし、領国の危機を

救いました。書状の中で元春は、福頼左衛門尉の功績を激賞しています。

この河原山の合戦は伯耆国で行われた戦国時代最後の合戦であると言われており、後には伯耆国にも新たな秩序が形成されていきます。まさに、時代の変わり目を切り取ったかのような、



写真：吉川元春書状

貴重な文書であると言えます。

宮本家文書につきましては、常設展示室の戦国時代コーナーにおいて順次展示中ですので、是非ご覧ください。

（学芸課 山本 隆一郎）

コラム

改葬された伊福吉部徳足比売の墓

伊福吉部徳足比売は因幡国法美郡の豪族・伊福部氏の娘または兄妹（姉弟）と考えられる女性で、藤原宮で采女として文武天皇に仕えました。和銅3年（710）に火葬された遺骨を納め因幡の地で葬られたこと等が青銅製の骨蔵器（写真1）の銘文に刻まれています。この墓は、古代の墓誌を持つ墓としても火葬墓としても特に古く稀少なもので



写真1：伊福吉部徳足比売骨蔵器（東京国立博物館所蔵）
Image:TNM Image Archives

す。骨蔵器は国重要文化財に指定され、出土地は国史跡になっています。

骨蔵器は、安永3年（1774）に鳥取市国府町の山中で発見された後、宇倍神社の神主を代々務めていた伊福部氏のもとで「徳足権現」として祀られていました。また、鳥取藩医安陪恭庵が寛政7年（1795）に著した地誌書『因幡志』でも骨蔵器が入っていた石と蓋の銘文を図解で紹介され注目されています。

このように祀られてきた骨蔵器は、文政2年（1819）に元の墓とは別の場所へ埋葬されます。その経緯は、鳥取藩の農村部を管轄した御用場の日記である『在方諸事控』に記されています。文政元年（1818）に骨蔵器の持ち主である伊福部大蔵が藩の寺社奉行へ提出した願書に、「骨蔵器を元の墓へ

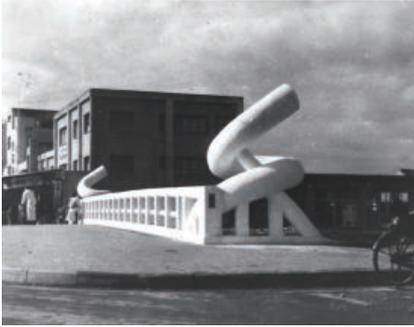


写真2：文政2年（1819）に改葬された徳足比売の墓

葬りたいが、その場所が大雨の度に土砂が流れ崩壊目前であるため、占いで選ばれた同じ山続きの上山に埋葬したい」と書かれています。大蔵にとって骨蔵器は、これまで何度も寺社奉行などから埋め戻すように言い渡されていた懸案事項でした。上山は藩有林でしたが、条件付で大蔵に譲られることとなりました。骨蔵器は45年ぶりに再び埋葬され、その際に立てられた墓石（写真2）には、江戸時代の国学者・衣川長秋の碑文が刻まれています。

（学芸課 酒井 雅代）

若桜橋のモニュメントについて やまもと かねふみ 山本兼文の野外彫刻を訪ねて



若桜橋の完成当時の様子(撮影者不詳)

鳥取駅と鳥取県庁をつなぐ鳥取市のメインストリートを走ると、袋川にさしかかるあたりで、高さ3メートルほどの白い螺旋状の彫刻が現れます。これは、橋の親柱となるもので、欄干の両端に、全部で4体設置されています。デザインは、岩美町出身の彫刻家 やまもと かねふみ 山本兼文によるもので、1955年に制作されまし

た。この作品には、一体どのような意味が込められているのでしょうか。

1952年4月、鳥取市で大火災が発生し、市街地に甚大な被害をもたらしました。この災害は、1943年鳥取大地震、1945年の敗戦からようやく復興した市民にとって、大きなダメージを与えるものでした。こうした状況の中、都市再建への計画に伴う道路拡張が進み、改修する若桜橋の袂に大火復興のシンボルを設置することとなりました。作者は、「大火に見舞われ、暗い空気に包まれていた市民に希望を与えたい」という願いを込め、平和の象徴である白を基調として“空高く上昇する不死鳥”を抽象化した形を創り上げました。骨太のフォルムは、景観のアクセントとなるだけでなく、力強い印象を与え

ています。多様な解釈を生む作品ですが、平和への切なる思いをこのスパイラルのように後世へと伝えたい、教師であった山本兼文は、そう願っていたかもしれません。

(美術振興課 やまもと とおろ 山本 亮)

◆展覧会予告◆

美術部門テーマ展示Ⅱ
生誕100年山本兼文展

鳥取を代表する彫刻家山本兼文の生誕100年に当たる今年、その活動を回顧する展覧会を開催します。初期～晩年までの彫刻作品の他、絵画や素描、ゆかりの品々や手掛けた野外彫刻の写真パネル等をご紹介します。

【会 期】 11月23日(金・祝)～12月24日(月・振休)
(休館日：12月10日(月))

【会 場】 鳥取県立博物館 第1特別展示室

【入場料】 一般180円

※大学生以下、70歳以上の方、同時開催の企画展のチケットをお持ちの方等は無料。

コ ラ ム

「ワークショップつくり隊」の活動

あいにく展示期間が7月の豪雨と重なってしまいましたが、博物館の前庭に色鮮やかな色水の造形が繰り広げられました。現代美術に詳しい人であれば、具体美術協会もとなが さだまさの元永定正さんの作品を連想するインスタレーションは6月30日に開かれたワークショップ「色水であそぼ!」の情景です。博物館ではこれまでもこのようなワークショップを次々に開催しましたが、今回のワークショップは博物館や学芸員ではなく、「ワークショップつくり隊」の皆さんによって企画されました。

以前より美術部門のワークショップに熱心に参加されている皆さんから、自分たちの手でワークショップを企画できないだろうかという相談を受けて、「ワークショップつくり隊」の最初の

会議を開いたのが今年の2月、世代もお仕事もばらばらの10名ほどのメンバーがそれ以来10回余りの会議を開き、「色水であそぼ!」を含めて3回のワークショップを企画、実施しました。学芸員も相談には加わりますが、基本的にはメンバーの皆さんの発案で進められた新しいタイプのワークショップです。

単に展覧会を見に来るだけの場所ではなく、いろいろな可能性をはらんだ場所としての博物館や美術館の役割が問われる今日、学芸員でもなく単なる参加者でもない、施設と社会をつなぐ役割を担うスタッフの役割が注目され



色水で彩られた博物館前庭

ています。新しい美術館に向けてボランティアへの関心も高まっていると感じています。博物館ではこのような地道な取り組みを通して、館と関わる人々の数を増やし、層を厚くしていきたいと考えています。

(副館長兼美術振興課長 おさき しんいちろう 尾崎 信一郎)

「私たちの県立美術館」の動き

鳥取県では、これから新しく県立美術館を倉吉市（倉吉パークスクエア隣接）に整備します。

今年7月には県立美術館整備基本計画を策定し、『未来を「つくる」美術館』をコンセプトに、これまでの県立博物館の美術部門を引き継ぎ、さらに充実した事業を展開していく予定です。

「サードプレイス」となる美術館に

新しい美術館は、様々な人が訪れ、集い、楽しみ、交流する拠点とします。「サードプレイス（家でもない、学校・職場でもない第三の居場所）」として、美術鑑賞のみならず思い思いに過ごせる憩いの場、最先端の映像や音響設備を備え、イベントの式典やパフォーマンス等を開催できるユニークベニューの機能をもった施設とするなど、魅力的な美術館にしていきます。

「美術を通じた学び」の支援

県立美術館の特色として、「美術を通じた学び」の支援を行う「美術ラーニングセンター（仮称）」機能を設けます。現在の県立博物館の教育普及機能を充実させ、学校教育と連携して美術のほか様々な教科へ展開を図り、子どもたちの想像力や創造性、これからの時代に求められる他者理解等のコミュニケーション力を育むことを目的としています。現在、デジタル鑑賞教材の試行などを進めているところです。

県内美術系文化施設との連携

県立美術館を拠点に県内の美術系文化施設が連携し、県内どこにいても美術館のサービスが受けられる環境づくりや、「とっとりのアート」の県外への発信力を強化していきます。

現在、各館の所属作品をデジタル



巨大バルーンを作って遊ぶワークショップ

アーカイブ化し各館でそれらを紹介できないかなど、検討しているところです。

美術館づくりと一緒に

美術館を訪れる楽しみや居心地の良さの一つが建物であり、県内文化団体の意見や専門家の助言等を踏まえ、県民の方々等とコミュニケーションを図りながら、美術館づくりを進めていきます。ワークショップ等にぜひご参加ください。

新しい情報はこちらのホームページをご覧ください。

<https://www.pref.tottori.lg.jp/artmuseum/>
(美術館整備準備室 石原 理絵)

鳥取県立博物館・河北博物院交流20周年 「中国河北省の伝統工芸 剪纸・年画・皮影芝居」

平成30年 11月23日(金・祝)
～12月24日(月・振休) 休館日あり

会場：鳥取県立博物館 第3展示室
入場料：常設展入館料(一般180円)が必要



河北博物院(新館)

今年は当館と中国河北博物院が友好交流館の協定を締結してから20周年を迎えます。交流20周年を記念して、当館では河北博物院が所蔵する

河北省の伝統工芸品を展示します。主な内容は、中国の正月にあたる春節に家の門扉や窓などに貼る縁起物の刷物「武強年画」、吉祥図や京劇をモチーフにした切紙細工「蔚县剪纸」、ロバ皮の人形を使った伝統的な影絵芝居「唐山皮影芝居」です。見応えのある作品が展示されますので、ぜひご覧ください。



武強年画



蔚县剪纸



唐山皮影絵芝居人形

(学芸課 大嶋 陽一)

鳥取県立博物館ニュース No.26

平成30年(2018年)9月28日発行

編集・発行 鳥取県立博物館

住所 〒680-0011 鳥取市東町2丁目124番地

TEL 0857(26)8042(代)

FAX 0857(26)8041

URL <https://www.pref.tottori.lg.jp/museum/>

E-mail hakubutsukan@pref.tottori.lg.jp

当館HPは
こちらから



facebook 更新中!

- 入館料：常設展／一般180(150円)
()内は20名様以上の団体料金
- 開館時間：9時～17時(入館は16時30分まで)
19時(入館は18時30分)まで開館する場合あり。詳細はお問い合わせください。
- 休館日：毎週月曜日(祝日の場合は翌平日が休館日)
国民の祝日の翌日(土、日、祝日の場合を除く)
年末年始(12月29日～1月3日)
※具体的な休館日等は、ホームページでご確認ください。



- JR鳥取駅からバスで
- ①100円バス「くる梨」線コース「@仁風閣・県立博物館」下車すぐ
- ②ループ線「鶴崎子」下車すぐ
- ③砂丘・湖山・磐倉方面行「西町」下車、約400m
- ④市内回り岩倉・中河原方面行「わらべ館前」下車、約600m
- JR鳥取駅からタクシーで…約10分
- 鳥取砂丘コナン空港から…鳥取駅行連絡バス「西町」下車、約400m
- お車で…鳥取自動車道・鳥取より約15分
- ※当館駐車場21台駐車可能・満車の場合は県庁北側駐車場無料へ

お客様の満足の為へ…
MORRIX
株式会社モリックスジャパン
TEL 0857-23-3641
本社 鳥取市南栄町2の3-6
倉吉店 倉吉市下田町中8-7-0 中瀬ビル3F
<http://www.morrix.co.jp/>

引越は日通
0120-154022